



情報科学センター長に就任して

鶴 正人¹

前任の堀江知義センター長が入試担当副学長に就任されたことに伴い、2010年4月から情報科学センター長を仰せつかりました。私が指名されたのは、以前に長崎大学において同様の組織（総合情報処理センター）の助手をしていた経験がある点と、今の研究分野であるインターネットやユビキタスネットワークを含む情報通信ネットワーク技術が本センターの業務と関係深いという点に尽きると思います。九州工業大学の情報科学センターといえば、歴代のセンター長の下、プロフェッショナルなスタッフを揃え、最先端の技術と挑戦的な試みによって、九州というより日本の情報処理教育や情報基盤環境構築をリードしてきました。そのようなセンターの長は、私にとって分不相応なものであり、特に学内でのリーダーシップや政治力も重要になるため、躊躇したのですが、一方ではそのような組織の内部を見たいという気持ちや、また何人かのスタッフを同業者として以前から存じ上げていたこともあり、力不足を承知でお引き受けした次第です。

実際に中に入ってみますと、従来の、教育研究のための情報設備・施設の提供、計算機・情報システムの管理運営、情報基礎教育および情報専門教育の支援、情報科学に関する研究開発、さらに、キャンパス情報ネットワーク（幹線）の管理に加え、情報セキュリティ管理、統合認証、図書館電子化などの学内情報基盤整備の支援など、多岐にわたる業務を各キャンパスで実施しており、しかもスタッフの数は以前からあまり増えておらず、大変な職場であることを実感しています。さらに、学術情報委員会、基盤室、図書館、eラーニング事業推進室、総務課情報システム係など、様々な関連組織が、その責任や作業分担の面で複雑に入り組んでおり、私自身、いまだに正しい全体像を把握仕切れていない状態です。これらの現状は、本センターというより、九工大、さらに日本全体が、大きな変化の渦中にあることの帰結だと考えています。広報第20号の巻頭言で、江島俊朗前センター長がダーウィンの「唯一生き残るのは変化できるものである」という言葉を引いて変化の重要性を書かれていましたが、本学の情報基盤を単純性と柔軟性を持って持続的に発展できる形に整理していくためには、国内外の最新技術や考え方の動向を参考にしたり、さらに外部機関との協調・連携を行うことが必要であり、そのためにも本センターの役割はますます重要になると認識している所です。

本学の2010年度における新しい動きの例として、「学認」と「大学ICT推進協議会」への参加があります。前者は、様々な機関が提供する、電子ジャーナル、電子メールクライアント、e-Learningシステム等の研究者・学生向けのWebベースサービスに関して、研究機関が連携しユーザ認証を分散化し多くの学外研究機関で学内IDを用いたサービスが利用できる枠組み（認証フェデレーション）です。一方後者は、さらに大きな志の大学間連合体であり、米国EDUCAUSEなどを参考に、大学における情報

¹情報工学研究院電子情報工学研究系 教授 tsuru@cse.kyutech.ac.jp

巻頭言

技術の活用，情報教育，そのための人材育成をより包括的・戦略的に対応するための ALL JAPAN 大学間連携を目指しています．本学はその発起人の一人になっており，甲斐次長を中心に準備の段階から積極的に役割を担っています．

現在，財政が厳しい中での計算機システム・ネットワークシステムの維持・更新問題，セキュリティ管理に代表されるコンプライアンス問題，ICT を利活用した研究教育全体にわたる質的向上のための環境整備問題など，本センターが直接間接に関係する大きな課題が山積しております．全学の構成員に開かれたセンターとして，大学の将来を見据えた活動を推進していく所存ですので，その重要性をご理解いただき，全学のみなさまの更なるご支援ご協力をよろしくお願い申し上げます．